

【5歳児 5月の事例】

身近な生き物に愛着をもち、ふさわしい飼い方を知ろうと取り組む  
「に・ぼ・し。にぼしだって」

① A児は、空き箱に梱包材を敷き詰め、ダンゴムシを入れて仲良しのB児と園庭でしゃがみこんでいた。保育者が「ふかふかなのね」とのぞき込むとA児は満足げな表情になった。保育者が、「土は入れなくていいの」と聞くと、A児は土を入れ、ダンゴムシは湿り気のある土の中に入り込んでいった。A児が「ここが気持ちいいのかな」と言って見ていたが「家に帰ったら逃がすの。ママ、虫嫌いなの」とつぶやいた。その日の降園時、保育者は、母親にA児が虫と関わる中で経験したことや気づいたこと等を伝えた。

② 降園後、園庭でA児と母親が「家で逃がす」「園で逃がそう」と言い合っていたが、「家に持ち帰り1日たったら逃がす」ということに決まった。翌週の朝、母親に尋ねると「翌日逃がしました。今日もダンゴムシを捕まえるんだと箱を持って来ました」と笑顔で話してくれた。

③ その日の午後、A児は、持って来た箱の中に土を深めに入れ、さらにダンゴムシの餌として、ピンクと白の紙を細かく切ってゼリーカップの中に入れ、箱の隅に置いた。保育者が「これ何」と聞くと「ダンゴムシは何でも食べるんだよ」とA児が答えた。保育者が「何かで調べたの」と聞くと「本がないから調べてないよ」とA児が言ったので、保育者は「何を食べるか調べてみようよ」と一緒に保育室へ戻り、数冊の中から“生き物飼う方図鑑”を手渡した。A児は「ダンゴムシ、ダンゴムシ」と言いながら探し、ダンゴムシのページに魚の絵が描いてあるところで目をとめた。「に・ぼ・し。にぼしだって」とA児は言い、白とピンクの紙が入ったゼリーカップを指し「これは、ダンゴムシの家の飾りにしようと思ってたんだ」とつぶやいた。

④ 降園後、A児は、B児と母親と一緒にダンゴムシを囲み「色が薄いのは小さいってことかな」「煮干しを食べるんだよ」「煮干してルル（飼犬）のおやつのおしゃべりが続いた。

翌日、母親は「本当に煮干しを食べるんですか」と半信半疑だったが、A児の話を受け止め煮干しを持たせてくれた。A児とB児は「食べるかどうか見たいよ」と、ダンゴムシの動きにじっと目を凝らしていた。



幼児の姿から『学びに向かう力』を読み取ると…

【愛着、好奇心】	【葛藤、折り合い】	【自己主張】	【発見の喜び】 【生命の尊重】	【探究心、集中力】
①自分なりの思いを込めてダンゴムシの家を作り、ダンゴムシの生態に気付いた。	①母親が虫嫌いなので、ダンゴムシを逃がさなければいけない、という気持ちになった。	②もう少し一緒にいたいと思い、「家で逃がす」と言った。	③ダンゴムシの餌が煮干しであることを見つけ、紙は、餌でないこと納得した。	④友達や母親と互いに考えを伝えながら試したり確かめたりした。

学びに向かう力

自分の気持ちを調整する力

粘り強く  
取り組んだり  
挑戦したりする力

仲間と協調する力

環境の構成のポイント



「幼児が必要とするものを用意し、納得できるようにしましょう」

- 同じ生き物に対して一人一人気付くことや関心をもつことは、異なります。友達同士で、興味、関心をもったことを交換し合ったり、名前、生態や飼い方を調べたりすることができるよう図鑑、絵本等を数種類用意しましょう。

保育者の関わりのポイント

「幼児の関心事を受け止め、問いかけて好奇心・探究心を深めましょう」

- 生き物に対する好奇心や探究心、生命を尊重する気持ちは、その対象への愛着が基になります。愛着をもつことでその生き物の生態をよく見ようとしています。5歳児になると、自分本位な飼い方から、その生き物にふさわしい飼い方に気付いて飼育するようになります。生き物への興味を示した機会を捉え、保育者も一緒に生態を観察したり飼育したりすることで、幼児の好奇心や探究心を深めていきましょう。



家庭での関わりのポイント

「一緒に観察したり調べたりして、幼児が不思議に思ったり、気付いたりしたことを大切にしましょう」

- 幼児は園で様々な生き物に出会い、見たり触ったり試したりすることで、好奇心や探究心を膨らませていきます。「虫などを触ったり見たりするのは苦手」という保護者の方もいるでしょうが、幼児の発見することに目を向け、一緒に驚いたり楽しんだりしていきましょう。
- この時期の幼児は「知りたがり屋」という特長があります。大人にとっては、当たり前に分かっていることでも、すぐに正解を教えるのではなく、幼児と一緒に観察したり調べたり、不思議に思ったりしていくことが、幼児に幅広い見方、深い考え方をする土壌を培い、学びに向かおうとする意欲を育みます。



学びに向かう力を育むための手立て